

■ 第一話 タッチちゃんの雪景色

■ 1

あの時はタッチちゃんも酔っていたし、だいいち夜だったから見間違えというところで済んだけれど、今度は真つ昼間だし、タッチちゃんはこれからとつくり、に行くところなのだから酔っているはずなんてない。

「飲みに行くんじやろが？」

その誰が見ても人間とは思えない、宇宙人とか言いようのないその男——と言うべきだろうか？ ——は、タッチちゃんの頭の中に話しかけてきた。

「ああ」

「いつもの仲間とかいね？」

「ああ」

「ほしたら、あの、マサさんによろしゅう、言うとかればってん。あん人も、ワイの存在、信じとりやしてはらへんばいからね。」

「ああ」

「マサさんとも、こないだの夜に会つとるんばい。」

「ああ」

別にアゴが外れた訳ではなかったが、タッチちゃんは「ああ」としか言えなかった。だからと言って宇宙人が目の前にいるから驚いたというわけではない。宇宙人が来産語——九州来栖産業大学でしか通用しない、日本全国ゴチャマゼ方言——を使っていたからだ。

「んじやまア頼んだべ。」

そう言う宇宙人はマンホールのフタを開けて中へ消えてしまった。

「はあ〜」

タッチちゃんは感心した顔でマンホールをながめていた。

「言葉の達者な宇宙人だこと。」

■ 2

「とすると何かい、タッチちゃん。要するに金がねえってわけかい？へつ、べらんめえこちら江戸ッ子よ、俺にまかしときな。」

「ヤマさん、でつけえことバ言わはらんと。てんごはそのへんで、よしにごしなんせ。」

酔うと急に江戸ッ子になるヤマさんを、チンさんが困り顔で、なだめていた。

タッチちゃんの仲間が集まる「とつくり」は、まるで時間が止まったような古くさい内装の居酒屋だった。来産語がとびかい、冗談と本気が見分けられない、そんな雰囲気のおかげで、タッチちゃんは宇宙人の事を話せずにいた。いや、それよりも、実は、タッチちゃん自身にちよとした事件が起こっていたのが理由かも知れない。

「しかし、なんだなや。バアさまが病気つちゆうに田舎へキヤアる金にやあつてのは、しんどいことでおまんな。」

「タッチちゃんは北海道やったかナ？」

「うん」

「こないだ『雪が見たい』ちゆうてたんは、虫の知らせでもあつたとかいね。」

「そげなこと、縁起でもない。言うもんじゃなかよ。」

「しかし、北海道はヨカねえ、でつかあて。」

「うん。ねえ？ どこかに、いいバイトないかな？」

「ない！ ないないない。あつたらみんな先に取っちゃつてるわヨ。みんな金欠ばーつかなんだから。」

とつくりのマドンナ、ヨツコが、タッチちゃんをなぐさめているマサさんとジュンくんに冗談めかしにイヤミを言った。

「だいたい、ウチのツケもまともに払えない人たちばっかなんだから。」

「悪い、悪い！ そこんところはカンベンしてちよーヨ。」

「マサさん、謝ってばっかで払ったことないじゃん。…えーと、ヨツ

コは東京じゃったね、確か。」

「ええ、そうだけど？」

「東京でも一応、故郷ふるさとじゃあと思つとりやるじゃろ？」

「まア：ね。」

「タッチちゃんは、じゃ、その故郷の、タッチちゃんを育て、イツクシンできてくれたバアチャマが死にかけとるっテンで困つとるんちゃ。」

「またあ。死にかけてのはひどいよ。ジュンくんは口、悪すぎだよ。ちよつと風邪をひいただけだつて。」

「まっまつ、なんにしろ、こじらせてるから見舞いに帰ってきてくれって手紙が来よつたんバイ？ 金はオラたちにまかせんさい。バイトなり大金持ちなんなり、探しといてやるけん。なアみんな。」

「ああ。」

とみんなが安請け合いの返事をした時、ポーンと、柱時計が眠たげに一つ鳴った。

「四時半だ。急がなくなつちや。」

「どうしたのタッチちゃん。」

「学費、明日中でしょ？ 今日金をおろしておかないと。」

「ああ、キヤツシユカードかい、行ってきねい行って来ねえ…とと銀

行預金ギリギリかい？」

「そうなんだ。なんだかんだ使っちゃって……」

「金……家の方に頼んだらどうなの。」

「ダメっすよ。家バアちゃんひとりで貧乏だし、俺がバカスカ使うからいけないだし。」

「律儀じゃにやあか。」

「へへへ……。じゃあ急ぐから……。あ、そういや、マサさんよろしくって。」

「誰ぎゃ？」

「えっ？ うーん、見た事もない……」

「美人？」

「うん、そんなとこ……かな？ えっと。うーん。じゃあ。」

タッチちゃんはマサさんにどう説明すればいいのかわからなくなつて、そのまま外に出てしまった。そして銀行に向かう道のり、じつくりと考えていた。

……しかし、あの宇宙人って、男？ 女？ 美人？ ブス？ 全然わかんないや。

■ 3

タッチちゃんは金をおろし、ここ二三日の食料と一升瓶を抱えてアパートへ帰る途中、なんととはなくあの宇宙人にもう一度会いたくなつた。

特に宇宙人など存在しないなど思っていたわけではなかったし、目に見えたものは、なんでもすぐに信じてしまうタチだった。それにタッチちゃんは子供の時から何度も幽霊に出会っていて、その度に幽霊をじっくり観察したくらいだった。

……幽霊をはじめて見た時はバアちゃんがいつしよだったなあ。一生懸命念仏唱えてたっけ、バアちゃん……。風邪こじらせたってほんとやっぱ、なんとなく、あの宇宙人に会いてえなあ。

と、その時タッチちゃんの前二十メートルのところにあつたマンホールのフタが開いた。例の宇宙人がひょっこりと顔を出した。

下水道つちやあ汚なかね。日本政府は下水道も上水道並にきれいにすべきやと思うわ。

わけのわからない事を言いながら、宇宙人が近づいて来た。

ア。アパートまでかいね？ 荷物、半分ワシが持ってやる。

と宇宙人は手を伸ばして来た。タッチちゃんは荷物をスツと横によけ、ほっぺたをプツとふくらませてイヤな顔をした。

「何言ってるんだ。下水道から出て来た汚い手で！」

「あ、悪か！ 良う、考えもせんですまん。そして宇宙人はピヨコツと頭を下げた。」

4

宇宙人は酒を飲んでいた。

「タッチちゃん知つとつとか？ こうやって升の端に塩ば乗せて飲むとめちやくちやうまい言うのん。」

「あ、俺知らない。そんなにうまいん？」

「ああ！ タッチちゃんもこげんアパートで一人暮らしじやろ、酒のうまい飲み方ぐらい知つとかんと何の楽しみもなくなっちゃうぞら。」

タッチちゃんと宇宙人は十年來の友達のように仲良く、近所の酒屋で一番安い一本の日本酒を飲みあっていた。それは、宇宙人の来産語が絶妙だったせいもある。

来産産業大学は、学生獲得のために、「唯一学部方針」を採用していた。さまざまなジャンルで他学にはない学部や専門課程を用意し、その独自性で、地域を越えた幅広い地方からの入学者を迎えていたのだ。それゆえ、学内は日本全国の方言がごちゃ混ぜになってしまふ。しかも、来産大特有の微妙なルールまでが確立しており、習得は来産大学生以外では、困難を極めるのである。

しかし、この宇宙人は、その困難な来産語を見事に使いこなしていた。

「酒はやつぱり、この『街灯り』が一番だよ。俺なんか酔えりやあいって方だから。」

「明日、講義あるんばい？ エエとこでやめんと、二日酔いはつらいガネ。」

「明日は自主休講。バイト探しに学相に行かないと…。それより宇宙人、だいたい、おまえさんは、何しに地球に来たんだい？」

「おう！ それじゃそれじゃ。すっかり忘れとつた。実はなあ…。タッチちゃん、新人類になる気はなかね？」

「うっ、なにそれ。いきなり新人類って。酒、こぼすところだったよ。こんなボロアパートに似合ってなさすぎだよ。」

「いや、ワシは宇宙を救う救世主を探すのが仕事でな、その一環で、タッチちゃんを新人類にしてきたんじや。」

「救世主？ 僕が？ ちよつと、おかしいんじゃない？」

「いや、おかしくは無かよ。だいたい、お前さん、明日バイト見つからなかったら、どうするつもりだった？」

「え？ バアちゃんの事かい？ 考えたんだけど、俺やっぱ働きたいんだよ。バアちゃんに無理かけて働かせるより大学やめてさ。」

「じゃろ？ じゃからバイトが見つからなかったら学費で家へ帰って

…。
「ウン、学校やめようと思ってた。まだちよつと迷ってるけど。」
「エライ！それでこそタッチちゃんだ。そういう優しさがなきやいかん
バイ。絶対いるんズラ、宇宙の中じゃあ。」
「え？ そんな事が大事なの？」
「そーたい。優しくなくつちや、生きていけんとよ。宇宙つてところ
は。」

「なんか安っぽいなあ。」

「現実の宇宙は、そんなもんだべ。さつ、タッチちゃん行こう。」

「え？ 行ってくつてどこへ？」

「宇宙の端から端までよ。」

宇宙人はタッチちゃんの手を取ったかと思うと軽く飛んだ。「ちよつと待って」と言う間もなく、少しくらつとしたエレベーター感覚がタッチちゃんを襲った。

☆ ☆ ☆

そこはもう地球が足の下だった。地球は本当に青かった。ついタッチちゃんは見とれてしまった。

「宇宙人よ、思ってた以上に地球は青いんだな。」

「そうけ？ 一十萬年前に比べると雲泥の差じゃ。今の地球はほんとうに汚のうなつた。さつタッチちゃん、これからじゃけんに。」
また宇宙人は軽く飛んだ。

☆ ☆ ☆

今度はそうとう気分が悪かったが、目に見えている風景は美しく、そしてそれは恐ろしいスピードで後ろへと流れ去っていった。

ふつと気がつくとう宇宙人がいない。あたりは真つ暗だった。何ひとつない。目の前にまた何か見えてきた。ぐんぐん近づいてくる。ふたたび恐ろしいスピードで美しい景色が後ろへ後ろへと消えていく。

そんな事をどのくらいくりかえしただろうか。タッチちゃんの目の前に幽霊が立っていた。よく見るとそれより手前でバアちゃんが幽霊に向かつて念仏を唱えている。タッチちゃんはバアちゃんが幽霊になかった。よく見ると幽霊は宇宙人の顔をしていた。

「バアちゃん、もういいよ。」

と、タッチちゃんはバアちゃんに声をかけ宇宙人の幽霊に近づいていった。

宇宙人の顔はヘラヘラと笑っていた。バアちゃんが笑われたような気がしたので腕自慢のゲンコでタッチちゃんは思いつき宇宙人をなぐ

りとぼした。
「アイタツッ！」

ふと気がつくともとのアパートだった。
「タッチちゃん、ひどいよ。いきなりなぐるんじゃけん。」
「ありや。なんだ、もとに戻ってら。キツネに化かされたみたいだな。」

「何言つとるんよ。…で、どうやった？ 旅の感想は。」

「きれいだった。」

「それだけか？」

「うん」

「こう、頭の中が広くなったように感じるとか、テレパシーが使えるとうだとか…。そういう感じはせんけえのお？」

「いや…別に…。あつそうだ。腹が立った。お前バアちゃんを笑ったろう。」

「腹が立った？ ああ、だめだこりや。お前さん新人類になりそこねた。」

「なんで？」

「腹立てちやダメなんバイ。」

「ほーん。まあいいや。新人類になんかなりとうないし。」

「そーか。それならヨカツペ。オラの役目もこれで終わりじゃけ帰るぞら。」

「もう帰るんか。」

「そらまあ少しは時間はあると。バツテン、上司がやかましいよってチョット早めに出とこと思つてナ。みやげになんか願いかなえてやるよつて、なんでも言つてチョ。あ、でも金は出せんとよ。上司がうるさいけん。」

「別に望みなんてないなア。それより酒の相手が欲しいんだ。つきあつてくれんか？」

「おっ飲ませてくれるんネ。じゃ、朝まで付き合おうとヨ。」

☆ ☆ ☆

どのくらいいたつたらうか。タッチちゃんも宇宙人もそうとう出来上がっていた。

「ウーイ。宇宙人、宙公。お前ところで、男か女か。」

「男バイ。」

「ドブスかハンサムか？」

「そういうのを愚問つっの。宇宙一のハンサムに決まっつーやろ。」
「そーか美男子か。そーか。フーン。そうか。」
タッチちゃんは眠たくなって来た。

「ウーン。ムニヤムニヤ。ヤイ宙公。お前……。フー。北海道の雪が見たいなア。ウーン。ファア……」
歌い疲れ、騒ぎ疲れ、飲み疲れたのだろう。とうとうタッチちゃんは眠ってしまった。そして夜が白々と明けて来た。

■ 5

タッチちゃんは夢を見た。
バアちゃんがみこしの上に乗っていた。みこしをかついでいるのがタッチちゃんだった。とっくり、のみんなといっしょにワツシヨイワツシヨイと騒ぎ立てて、みこしをかついでいる。一番前で大きなウチワでみんなをおおぎ、調子をとっているのは、あの宇宙人だった。
みこしは青い地球の周りをまわっていた。

■ 6

タッチちゃんは目を覚ました。いつもの下宿の二階の部屋だ。
「うーん。いい夢だった。」
と、伸びをする。実に気分のいい朝だった。宇宙人はすでに消えて

いなくなっていた。

「帰ったのか……」

宇宙人はいなくなっていたが、タッチちゃんもなんだかこの二三日持っていた迷いがなくなっていたようだった。

「ウーん。よし、決めたつと。」

顔を洗いに部屋の外へと出る。頭の中では、まだみこしがワツシヨイワツシヨイと言っていた。実に気持ちがいい。間違いなく何か吹っ切れたのだ。

一階に住んでいる管理人のおばさんの声が、階下から聞こえて来た。

「タチカタさん起きたのオー……？ なんかたくさん届けものがあるわよ。あつそれからネエ、もう二度と朝までドンチャンやらないでネ。」

「ハイイ。すみません。」

タッチちゃんは玄関脇にある、個人用郵便受けへ「届けもの」を取りに行った。紙袋が五つ束になっていた。開けてみると中にはお金が入っていた。全部で四万八千五百二十五円だった。

「みんな気イ利かせてくれたんだな。」

マサさん、ジュンくん、チンさん、ヤマさん、ヨッコの5人に違くない。
タッチちゃんはうれしかった。

「ありがとう、みんな。でもなア……」
でも、もう、お金などどうでも良かったのだ。タッチちゃんは家に帰るのは取りやめにしたのだから。
あの夢のせいかどうか、とにかく家に帰るのは取りやめに決めたのだ。

「せっかくバアちゃんが無理して行かせてくれてるんだもんな。もうちよつとガムバツて勉強しなくっちゃ。」

朝の空気を胸いっぱい吸い込もう学生が何人も住む、この学生マンションの玄関扉をガラッと開けたタッチちゃんだった。

「ワーオ！」

そこは一面の銀世界だった。

「キャ！どうなってるんだいタチカタさん。九月だって言うのに雪が降ってるよ。」

後からやってきた管理人のおばさんも驚いていた。

「あつ。はあ、すみません。ア、これ、俺の友達のイタズラなんです。」

タッチちゃんはあわててそう言ったが、おばさんは聞いているのかいないのか、その光景に驚いているだけだ。

タッチちゃんは心の中で言葉を続ける。

「でも、本当はイタズラじゃないよな、宙公。ありがと。なんだか俺、ここでも新人類になれそうな気がしてきたよ。

まったく北海道の銀世界にも負けない素晴らしい雪景色だった。

突然タッチちゃんは思いました。

「そうだ、マサさんに『よろしく』は男だって言つとかなきゃ。ガツカリするだろうな、マサさん。」

雪景色は陽の光を浴びて輝き、タッチちゃんの顔を明るく照らしていた。

■エピソード

その日、タッチちゃんに一葉の葉書が届いた。

「……ごめんよ。急に会いたくなつてウソ言つたんだ。バアちゃんは元気だよ。」

タチカタヒデオシ 様

ハルコ